

『中論』註釈書における idampratyayatā 解釈について

小澤 千晶

はじめに

Mūlamadhyamakakālikā (MK) の註釈書、*Prajñāpradīpa* (PP) と *Prasannapādā* (Pras) では、MK の帰敬偈を提示した後で、帰敬偈にいわれる「縁起」(pratītyasamutpāda) の語義解釈を行う。その中で、PP の著者バーヴィヴェーカ (Bhāviveka) は「縁起」の意味内容を idampratyayatā と確定している。一方、チャンドラキールティ (Candrakīrti) はバーヴィヴェーカの解釈を批判的に取り上げているが、Pras の他の箇所や *Madhyamakāvatārabhāṣya* (MA) では、「縁起」を idampratyayatā-mātra としている。つまり、MK の二大註釈者ともに、MK 帰敬偈の「縁起」を idampratyayatā という同じ言葉を持って理解していることになる。

縁起を示す術語ともいえるこの idampratyayatā という語については、これまで様々な研究がなされているが、少なくとも、これら二つの註釈書における idampratyayatā の意味内容に関しては、「相依(相待)」「相互依存」(parasparāpekṣā, sāpekṣā) を意味し、「中観的な縁起解釈」と表現されることもある。しかし、両註釈者とも idampratyayatā を「相互依存」としているとしても、その具体的内容はまったく同じなのであろうか。本研究では、両註釈書における idampratyayatā の具体的内容を検討したい。

以下、はじめに PP、Pras における縁起の語義解釈の箇所から、両註釈者が「縁起」を idampratyayatā(-mātra) としていることを確認する。続いて、バーヴィヴェーカとチャンドラキールティ、それぞれが提示する

idaṃpratyayatā(-mātra) という語の具体的内容を確認していく。これらの検討を通して、両註釈者の縁起観と二諦説との関係を明らかにしたい。

1 MK 註釈書における「縁起」の語義解釈

PP と Pras で行われる「縁起」の語義解釈の箇所については、これまでにいくつかの研究が行われている。代表的なものには、PP と Pras に加え、スティラマティの『大乘中観釈論』の該当箇所、さらに諸註釈書のベースとなった AKBh の翻訳を提示して、それらの比較研究を行った江島1985、PP の語義解釈と因果論を AKBh と対照させた能仁1986、バーヴィヴェーカの語義解釈とチャンドラキールティのバーヴィヴェーカ批判を取り上げその思想内容を検討した梶山1997、Pras の語義解釈を『俱舍論』AKBh と対象させて、この箇所全体がバーヴィヴェーカ批判であることを論じた永崎1999a などがある。以下、それらの研究の中で確認されてきたことと、残された問題点を確かめながら、両註釈者が「縁起」を idaṃpratyayatā としていることをみていきたい。

1.1 バーヴィヴェーカの「縁起」の語義解釈

PP は MK の帰敬偈を提示した後に、「縁起」の語義解釈を行う。以下に、PP の議論の一部をあげる。

「縁起」ということについて、(1)ある者は「次のように」いう。**prati* という不変化辞は分配を意味しているから、そして **i* は「到達すること」(**prāpti*)を意味するから、そして、**samutpāda* という語は「生起」(**sambhava*)を意味するから、「縁起」である。「それぞれの〔縁〕に依って、到達して生起すること」である、と。(2)他の者たちは「次のように」いう。滅するもののそれぞれの生起が「縁起」である、と。(3)他でない者(バーヴィヴェーカ)「はつぎのようにいう」。それも正しくない。「つまり」「眼と色に依って眼識が生起する」と説くこの場合には、二つの意味はありえないからである。では、どうであるのか。「これがあるときそれがある。これが生じるからそれが生じる」という「これを縁とすること」(**idaṃpratyayatā*)⁽³⁾ という意味が、「縁起」の意味である。

ここで、バーヴィヴェーカは二つの解釈を紹介して否定した後に、自身の解釈を「これを縁とすること」(*idampratyayatā, rkyen 'di dang ldan pa nyid) としてい
ることが分かる。また、ここでの議論は (AKBh) の議論を下地にしている。
参考のため、以下に PP が下地にした AKBh (AKBh 138.1-139.21) での構成
をあげる。

(A) 語の意味 (padārtha) 1

pratītya を prāpya, samutpāda を prādurbhāva と解釈して、「縁に到達して
生じること」(pratyayaṃ prāpyasamudbhavaḥ) とする。

(B) 文法家の論難とヴァスバンドウの回答

(C) 文の意味 (vākyaārtha)

「これがある時にそれがあり、これが生じるからそれが生じる」(asmin
saty asya bhāvaḥ asyotpādād idam utpadyate)

(D) 語の意味 (padārtha) 2 とその排斥

prati は「分配」を意味し、itya を絶対詞ではなく動詞的形容詞に解釈して、
「あれこれの原因の集合体に対して、それぞれの去るべきものが一体として生
起すること」(tām tām kāraṇasāmagrīm prati ityānām samavāyetotpādaḥ)

(E) 「これある時に彼あり、これが生じるから彼が生じる」の解釈について。

だが、AKBh を前提にしているとすると、次の 3 点に疑問が残る。

〈Ⅰ〉 (1)と(2)の紹介の仕方は決して充分ではない。つまり、AKBh の (D)
説を二つに分けて、(1)に (A) の pratītya を prāpya とする説を持ち込んでいる
のだが、チャンドラキールティはまさにこの点を指摘して、バーヴィヴェーカ
の引用の仕方と反論が稚拙であり、不適切だと批判している (Pras 7.6-10.10)。

〈Ⅱ〉 また AKBh では (A) 説を受けて、文法家の反論とそれへの回答が
なされるのだが ((B) 説)、バーヴィヴェーカは (A) 説を充分に紹介しないま
まに、上記の引用の後でその議論を展開している。

〈Ⅲ〉 さらに、AKBh では、自説として「縁起」の padārtha (語義解釈)
を (A)、vākyaārtha (文の意味) を (C) として提示しているが、バーヴィヴ

エーカは自身の語義解釈を提示せずに、「これある時に云々」という文の意味(C)に「これを縁とすること」を加えて、自説としている。

以上の点について、先行研究を振り返ってみたい。まず、〈I〉について、江島1985では、中観思想を具体的に論述するシステムとして二諦説を積極的に展開したバーヴィヴェーカにとって、「縁起」は八不の限定を受けようともそれ自体世俗にすぎず、語義解釈を積極的に扱う必要性を感じなかったとする。⁽⁴⁾

〈II〉と関連して、能仁1986は、バーヴィヴェーカは「これを縁とすること」という語で「相互依存」を説いており、意図的に語義解釈を行わないことで、縁起から時間観念を排除しようとしたのではないかと推測する。⁽⁵⁾ また、「これを縁とすること」について、永崎1999aは、バーヴィヴェーカが世俗のあり方と区別して、縁起を「これを縁とすること」と表現したとする。江島1985、梶山1997はともに、この語がそもそも時間的な因果関係だけでなく、論理的関係も意味すると解して、バーヴィヴェーカが縁起に論理的相待関係を持ち込んで解釈しようとしているとする(江島[1985: 150]・梶山[1997: 86])。

〈II〉については、江島1985、梶山1997は、文法学者の絶対詞は時間的前後関係を表す、という主張に対して、ヴァスバンドゥの2つの作用が同時にもありうるという立場(AKBh 138.3-13)をバーヴィヴェーカが継承しているために、「縁」と「起」を同時の関係にまで拡大しようとしていると理解する(江島[1985: 142, 150]、梶山[1997: 86])。それに対し、能仁1986は、同じ箇所を取り上げて、梶山、江島とは逆に、バーヴィヴェーカが縁起から時間観念を取り去りきれないことをあらわしているとして、PPのほかの記述もあげて、バーヴィヴェーカが世俗としては経量部の因果論を支持していることを論証する(能仁[1986: 787-788])。

以上、先行研究を整理すると、次の点がいまだ結論が出ていない。バーヴィヴェーカがAKBhの語義解釈を不完全な形で紹介したのは、意図的か、世俗に対する関心の薄さ故なのかという点。これはバーヴィヴェーカが「これを縁とすること」ということによって、何を意味しているかということと絡んで重要な点である。つまり、あくまでも縁起を世俗のこととしているとすると、

「これを縁とすること」の意味することも、AKBh, ヴァスバンドゥの「これがあるときに」云々をバーヴィヴェーカ自身の解釈として承認している可能性もあり、その場合は必ずしも「相互依存」を意味しないことになる。他方、それが「相互依存」あるいは、永崎1999aの言うように「世俗のあり方と区別した縁起」を意味する場合には、縁起の「文の意味」のみを説き、語義解釈を行わなかったことには一定の意図があると考えた方が自然であろう。このような点を念頭に置き、バーヴィヴェーカの「これを縁とすること」を検討する必要がある。

1.2 チャンドラキールティの語義解釈

語義解釈に対して消極的であったバーヴィヴェーカとは反対に、チャンドラキールティは積極的に語義解釈を展開する。以下に、チャンドラキールティが自説として提示する箇所をあげる。

動詞語根√i は「行くこと (gati)」を意味する。prati は「到達すること (prāpti)」を意味する。接頭辞によって動詞語根の意味は変化するから〔次のように云われている〕。

接頭辞によって、動詞語根の意味は強制的に他の〔意味〕に導かれる。

例えば、ガンジス川の水の甘さが海として〔塩〕水として〔なるように〕。

この場合、〔絶対詞の〕-ya を接尾辞に持つ pratītya という語は「到達すること」〔つまり〕「依存すること (apekṣā)」という意味で用いられている。samut に先立たれている動詞語根√pad は「現れること (prādurbhāva)」を意味するから、samutpāda という語は「現れる」という意味で用いられている。したがって、「諸存在の、因縁に依存した生起」(hetupratyayāpekṣo bhāvānām utpādaḥ) が⁽⁶⁾ pratītyasamutpāda (縁起) の意味である。

AKBh の(A)の見解に加えて、pratītya = apekṣā として、最後には「諸存在の、因縁に依存した生起」と、‘apekṣya’ という絶対詞を用いず、名詞である‘apekṣā’を「生起」(utpāda)を限定する所有複合語にして提示している。こ

の後、AKBh の(D)の議論を紹介し、そのあと、バーヴィヴェーカ批判に移る。

以上の展開に対して、永崎1999a は、AKBh の議論を前提としながらも、AKBh では文法家が提示した問題(B)への1つの回答として(D)が提示されているにも関わらず、チャンドラキールティが(B)にはまったく触れずに(D)を持ち出していることなどをあげて、チャンドラキールティの語義解釈の議論全体が一貫してバーヴィヴェーカ批判を目的にして展開されていると論じる。また、*pratītya* = *apekṣā* とする点について、諸研究はいずれも、「縁起」に *apekṣya* を持ち込んだところにチャンドラキールティの縁起観の特徴を見ている。とりわけ、江島1985は、中観思想を語る上で二諦説を具体的方法として採用したバーヴィヴェーカが世俗の事柄である「縁起」の語義解釈に消極的であったのに対して、バーヴィヴェーカの方法論に懐疑的であったチャンドラキールティは世俗に対し強いこだわりを持ち、自らを「縁起論者」⁽⁷⁾とも称する態度が詳細な語義解釈に繋がった。さらに、そのような彼の視点が、*pratītya* を *apekṣya* とする解釈を導き出し、*apekṣya* あるいは *apekṣā* をもって MK の縁起のみならず、あらゆる縁起の表現形式、概念内容を一貫して説明しようとするチャンドラキールティの縁起理解につながったとする(江島[1985: 150-151])。江島はこの「*apekṣā* をもってあらゆる縁起を説明しよう」ことの具体的内容については、これ以上述べていないため、この点を後で確認したい。また、江島1985は、両者の二諦説観の相違に基づくとはいえ、縁起の語義解釈に対する態度の相違から、二大註釈者間で「縁起」に対する理解が異なるのではないかということも示唆している。永崎1999a が、Pras のこの議論が一貫してバーヴィヴェーカ批判を意図していることを明らかにしていることを考え合わせると、チャンドラキールティの批判は、単にバーヴィヴェーカの語義解釈の仕方に対する批判というよりも、バーヴィヴェーカの縁起理解そのものに対する批判を意図している可能性もある。

さて、チャンドラキールティは、語義解釈の箇所では縁起を「諸存在の、因縁に基づいた生起」とするにとどまるが、第1章 k. 1 の註釈の中で、反論者

からの「自・他・自他・無因からの生起を否定するなら、世尊はなぜ無明を縁とする行があると説かれたのか」という問いを受けて次のように述べている。

答える。〔無明を縁として行があるという〕それは世俗であって、真実 (tattva) ではない。どのようにして世俗の確立が説かれるべきなのか。「これを縁とすることのみ」 (idaṃpratyayatāmātra) によって、世俗の成立が承認される。しかし、四句の承認によってではない。有自性論になってしまうから。そして、それは不合理であるから。というのは、「これを縁とすることのみ」を承認するとき、因果は相互に〔一方に〕依存するものであるから (hetuphalayor anyonyāpekṣatvāt), 自性による〔世俗の〕成立 (svābhāvikī siddhiḥ, ngo bo nyid kyis grub pa) はない。⁽⁸⁾ それゆえ、有自性論ではない。

まず、「無明を縁とする行がある」という縁起をあらわす表現を世俗であるとして、その世俗は「これを縁とすることのみ」によって成り立っているとす。この内容から、チャンドラキールティが「縁起」の「語の意味」としては「諸存在の、因縁に依存した生起」とする一方で、「縁起」の「文の意味」としては「これを縁とすることのみ」を承認していることが確認できる。そして、それが「因果は相互に〔一方に〕依存するものであるから」を意味しているといえるだろう。

2 チャンドラキールティの idaṃpratyayatā 解釈

2.1 idaṃpratyayatāmātra と世俗の成立

先の縁起の語義解釈の箇所では「自性による〔世俗の〕成立」 (svābhāvikī siddhiḥ) とあった。これは、チャンドラキールティが反論者側の立場を表したもので、それに対する自らの立場は「これを縁とすることのみによって、世俗の成立が承認される」 (idaṃpratyayatāmātreṇa saṃvṛteḥ siddhir abhyupagamyate) とされている。この「世俗の成立」を違う形で表現している箇所がある。その箇所をみてみよう。

それゆえ、以上のように、あらゆる諸存在が無自性であるならば、なぜ、上述のあり方の成立があるのか。そのことから、世間的な顛倒を承認した上で、陽炎の水のごとき世俗的な諸事物が常識的に成り立っている（*prasiddhi*）のは、「これを縁とすることのみ」を承認することによってこそであって、他のことによってではないと〔次のように〕いう。

行為者は行為に依って、そして、その行為者に依って行為〔という名称〕が生起する。それ以外の成立の根拠を我々は見ない。VIII-12

この世では、行為もしないで行為に無関係なものが行為者であることはないから、行為に依存して行為者は行為者となるのである。また、いかなるものであっても、行為者によってなされていないようなものが行為であることはないから、「その行為者に依って行為〔という名称〕が生起する」のである。現に行われていることにこそ、〈行為〉という名称（*vyapadeśa*）があるのだから。したがって以上のように、行為と行為者には相互依存した成立（*parasparāpekṣikīm siddhiṃ*）⁽⁹⁾以外に、「他の成立の根拠を我々は見ない」のである。

ここでチャンドラキールティが問題としているのは、「現に行われていることにこそ、〈行為〉という名称がある」という註釈に明確に表われているように、「行為者」と「行為」という名称、言語表現の生起である。チャンドラキールティは言語表現の生起を「世俗的諸事物の常識的成立」と位置づけ、それが「これを縁とすることのみ」を承認することによって可能だとする。そして、それが意味することとは、「行為者」という名称が「行為」に依って（*pratītya*）生起し、「行為」という名称も「行為者」に依って生起するという相互依存関係を両者の間に認めることだといえる。

また、次の詩頌で、ナーガールジュナが、行為と行為者と同様に、取と取者をはじめとするあらゆる事物を同様に知るべきだとするのを受けて、チャンドラキールティはその詩頌に「智者は」と補うように指示した後に次のようにいう。

智者は、行為と行為者の考察によって〔行為と行為者・取と取者など〕それらが自

性として存在することを否定した上で、老・生・死などの諸繫縛からの解脱すること⁽¹⁰⁾を求め、苦を滅尽するために相互依存した成立のみを思惟すべきである。

この内容から「相互依存した成立」とは、凡夫ではなく、智者にとって知られるべき世俗のあり方といえる。MA で展開される二諦説によれば、聖者のみる世俗は「唯世俗」(*saṃvṛtimātra)といわれる。これは、「相互依存した成立」つまり、「これを縁とするのみ」(idaṃpratrayatāmātra)と同義を指すと思われる。⁽¹¹⁾さらに、「苦を滅尽するために相互依存した成立のみを思惟すべきである」という一節からは、縁起を見ることが修道のひとつと理解されていることをうかがわせる。

以上のことから、チャンドラキールティの「これを縁とすることのみ」は、聖者から見た縁起、世俗の理解が示されている。では、聖者ではなく、凡夫の見た「世俗諦」をチャンドラキールティはどのように表現したかを確認したい。

2.2 parasparāpekṣikī siddhiḥ と parasparāpekṣyā siddhiḥ

Pras 第7章では、次のような議論が行われている。

なぜなら、自分自身にとっては諸存在は無自性であるけれども、そして、それら（諸存在）は無自性でありながらも、「これは真実である」と執着している凡夫たちにとっては、考察なしに確立している方法⁽¹²⁾によってのみ言語表現の道にやっつけている。したがって、彼ら（凡夫たち）には、我々の上述の考察への悟入はない。だが、幻や夢、ガンダルヴァの城の如き、世間的諸事物は、道理なきままに、智慧の目が無明という眼病に傷付けられている一切世間にとっては、常識的に成立するに至っている (prasiddhim upagatā)。それゆえ、[それら諸事物は] ただただ相互⁽¹³⁾依存によってのみ世間的成立に至ると、凡夫たちは「有自性論的に」承認している。

さきに parasparāpekṣikī siddhiḥ と Taddhita 接尾辞 -ika の女性形を持って表現されていた「相互依存」と「成立」の関係が、ここでは、

parasparāpekṣayā siddhiḥ と、-apekṣā の具格によって表現されている。これは、「無明という眼病に傷付けられている智慧の目を持つために、諸存在に顛倒した自性を増益して、あるものにある特殊性⁽¹⁴⁾」を増益した者たち、凡夫たちにとって、世間の成立は、その増益した自性を有する諸原因によってなされるという、成立のための作因を表す具格であるとみられる。つまり、凡夫たちにとっての世間、世俗諦は parasparāpekṣayā siddhiḥ としてあらわれる世間である⁽¹⁵⁾。

Pras 全編を通じて、この聖者の見る世間を表す parasparāpekṣikī siddhiḥ と、増益した自性からなる parasparāpekṣayā siddhiḥ の使い分けは徹底している。以下、その使い分けを明確に示す箇所を確認しておこう。

この二つの表現の使い分けがもっとも端的に提示されるのが、Pras 第10章の議論である。前にも触れたとおり、第10章は、自我と五蘊、つまり取者と五取蘊の関係を、火と薪との関係に置き換えて、どのようにしても、火と薪はそれぞれ独自の存在としては成立しないことが明らかにされる章である。この章では、火と薪の別異性などの吟味を行った後に、k. 6 以降で依存関係の吟味を始める。初めに提出されるのは、男女のように、それぞれ別に存在する関係と、火と薪の関係は異なることの指摘である (kk. 6-7)。それを受けて反論者は火と薪が「相互依存」の関係にあると、次のような主張を行う。

ここに言う。またもし火と薪には、女と男のように相互に〔一方に〕依存することなく成立することはないとしても、そうであっても相互に〔一方に〕依存することは、まずは成り立つ。またそのことから、火と薪には自体 (svarūpa) の成立がある。相互に基づくものであるから。というのは、現に存在しない石女の息子と娘には相互に基づくことが経験されないから、と。⁽¹⁶⁾

ここで反論者によって主張されているのは、自体 (svarūpa) を持ったもの同士相互の依存によって、現象の成立があるということである。これに対し、火と薪の依存関係のうち、どちらかが先に成立して依存するのか、あるいはそ

れが同時なのかが吟味され、否定されていく (kk. 8-10)。そして、同時の相互依存関係の成立の結論として、k. 11 の註釈において、チャンドラキールティは次のように述べる。

また、次のことから、火と薪両者の相互依存による成立もありえない。すでに成立したものや未だ成立していないものには依存がないから、と説明するために「次のように」云う。

「あるものに」基づいて成立するものが、未だ成立したものではないなら、どのようにして「そのあるものに」依存するのか。またもし既に成立したものが依存するとすると、そのような「既に成立したものの」の依存は不適切である。

MK X-10

というのは、薪といわれる存在に依存して成立する火という存在は、未だ成立しないうちに薪に依存するのか、既に成立して「薪に依存するの」か。もし、未だ成立していないもの「が依存するとする」場合には、未だに成立していない状態であるから、ロバの角と同様に、薪に依存することは決してない。「また」もし、成立しているなら、既に成就した状態であるから、なぜそれが薪に依存するのか。というのは、既に成立しているものが再び成立することないから。無意味であるから。薪についても同様に説かれるべきである。したがって、火と薪の両者には、相互依存による、あるいは同時での成立もありえない、と。

ここで、先に反論者によって提起された「自体を持つもの」としての火と薪の相互依存による成立 (parasparāpekṣayāpi siddhir) が否定されている。そして、火と薪の関係の吟味の結論として五種の探究が提示され (k. 14)、続いて、それらの次第が火と薪、すなわち自我と取の関係だけでなく、すべてに適用されると示される k. 15abc でチャンドラキールティは次のように結論付ける。

以上のように、五種のあり方において自我は存在しないのだから、それ故に、まさに「第 8 章 k. 12 で説かれた」行為と行為者と同様に、自我と取には相互依存しての成立が確定した。⁽¹⁸⁾

先に火と薪の「相互依存による成立」(parasparāpekṣayāpi siddhiḥ)を否定したチャンドラキールティが、ここで「相互依存しての成立」(parasparāpekṣiki siddhiḥ)を承認する。チャンドラキールティの立場であるこの「相互依存しての成立」とは、先の第8章 k. 12 から「行為者」と「行為」という名称が相互に依存して、つまり相互に一方を根拠として初めて言語表現が可能となる「相互依存」の関係を意味する。それに対し、反論者の云う「相互依存による成立」とは、それぞれ自体を持つもの、すなわち名付けの根拠を他に依存しないもの同士の「相互依存」だといえる。

以上、江島1985において示唆されていたように、チャンドラキールティは apekṣā という語の用法を使い分けることによって、自身の縁起観と、凡夫や反論者が主張する縁起観の表現を区別していることを確認した。そして、チャンドラキールティの縁起観として提示される「これを縁とすることのみ」とは、言葉が他の言葉との相互依存関係においてのみ成り立っている世俗のありようを示すものである。¹⁹

3 バーヴィヴェーカの idampratyayatā 解釈

3.1 「勝義として」の sāpekṣā

前述のように、バーヴィヴェーカの idampratyayatā 解釈について、これまでの先行研究では、「idampratyayatā という語そのものが、時間的因果だけでなく、論理的関係を意味する」とされたり、「中観的解释」とされていて、その具体的内容に踏み込んではいない。これは、バーヴィヴェーカ自身が、註釈書の他の箇所での idampratyayatā という語に言及していないことによると思われる。また、語義解釈の箇所では「文の意味」として idampratyayatā と同時に提示されている「これがあるときそれがある云々」という表現は、MK 第7章 k. 16 の導入に際し取り上げているが、「世俗として説かれているのであって、勝義としては説かれていないと承認している」と述べて、詳細な註釈をほどこしてはいない。また、MK の中で最も「相互依存の縁起」といいえ

るものが提示されている行為と行為者の関係を論じた MK 第 8 章 k. 12 に対しては、

行為者と行為に、行為者と行為の因があるとは、言説としての相互依存性であるが、⁽²¹⁾
それ以外にそれと異なる成立の因を我々はみない。

と、ここでも簡潔な註釈にとどまっている。では、反論者も相互依存を提示する第 10 章において、バーヴィヴェーカがどのような態度を示しているのかをみてみたい。

MK 第 10 章 k. 8 で、反論者は「勝義として、火と薪は存在する。相互依存しているから (phan tshun ltos pa'i phyir ro / /)」という見解を示す。それに対し、バーヴィヴェーカは勝義としては依存はありえないと答えて、⁽²²⁾ k. 9 の註釈では次のように述べている。

さらにもし、薪が先に成立するから誤りはないとするならば、答える。

もし薪に依存して火があるならば、既に成立している火が〔さらに〕成立することになる。MK X-9ab

既に成立している火については、特定の表現が語られているのだから〔既に〕薪に依存しているから、という意味である。そのように考察して、

燃やされるべき薪にも火がないものとなるだろう。MK X-9cd

その薪が先に、火に基づくことがなくても薪たるものとして成立しているから、という意味である。それは不合理であるから、この〔詩頌〕には〔帰謬の〕余地を持った言明がある。それゆえ、〔次の〕推論が明らかになる。勝義として、薪は火の前に成立することはない。依存関係を保持しているから。たとえば、火の自体のごとし。⁽²⁴⁾詳しくは前と同様である。

この直前で「勝義として依存はありえない」と反論者の見解を退けたバーヴィヴェーカが、「勝義として」という限定を付した論証式に「依存を伴うものであるから」(*sāpekṣatvāt) という証因を用いている。バーヴィヴェーカの二諦

説によれば、「勝義」(paramārtha)は二重構造を有し、「勝義として」と限定づけられた論証式は、世俗諦から勝義諦への橋渡しの役割を果たす慣習的勝義(*sāṃketikaparamārtha)に位置づけられる。「勝義として」と限定される論証式も、言葉を用いるという点では世俗的ではあるが、不生の教説を論証し、勝義を志向するという点で勝義とされる。したがって、バーヴィヴェーカは、「これがあるとき云々」を世俗としながらも、勝義の領域で依存関係を承認していることになる。では、バーヴィヴェーカが、「勝義として」承認する「依存を伴うもの」とはどのようなものなのか、次にこれを検討する。

バーヴィヴェーカが、この「依存を伴うもの」を「特定の表現を伴うこと」としていたことは、PP 第2章で確認できる。

〔去る者と去ることに〕別異性があると云う者たちも、去る者がない去ることと、去ることがない去る者は認めない。これは余地のある言明であるから、主張の属性(*pakṣadharmā)は、「去る者と去ることが**依存を伴うもの**」ということである。論証対象たる属性(*sādhya-dharma, 所証法)は、「別異ではない」ということである。喩例は、それに関して、〔論者と反論者双方に〕承認されている論証する属性(*sādhana-dharma, 能証法)と所証法を有する主体(*dharmin)であると示される。ここでの推論式は、

(P) 勝義として、去ることは去る者と別異ではないと知るべきである。(H) **特定の表現を伴うものを適用する(*pravṛtti) 依存関係を保持するから**。(D) たたとえば、去ることの自体のごとく。

(P) 同様に、勝義として、去る者も去ることと別異ではないと確定されるべきである。(H) **特定の表現を伴うものを適用する依存を保持するから**。(D) たたとえば、⁽²⁵⁾去る者の自体のごとく。

ここでは、去る者と去ることという、行為者と行為が別異ではないことを論じている。それを論じるにあたって、論証式の証因が「依存を伴うもの」であることが示され、論証式の中でその意味することが「特定の表現を伴うものを適用する依存を保持する」と限定されている。このように「特定の表現を伴う

ものを適用する依存を保持する」と定義された「依存を伴うもの」はPPの中で、幾度も用いられ、無自性を論証する重要な証因となっている。

さて、バーヴィヴェーカは「特定の表現を起こす因がある」(brjod pa khyad par can 'jug pa'i rgyu yin pa) という形で、反論者の見解をあげることがある。

時間実在論者たちは云う。〔勝義として〕時間は存在するにちがいない。〔時間によって〕特定の表現を伴うものの適用があるから。というのは、この世で、存在しないものが、特定の表現を伴うものを適用する根拠(*pravṛttinimitta)であるとは経験されないから。たとえば、ウサギの角の如し。時間は「茅の小屋が作られた(過去)、作られている(現在)、作られるだろう(未来)」という、特定の表現を伴うものを適用する根拠であると経験される。それゆえ、時間は存在するに違いない、と。

それは正しくない。「作られた」など特定の表現を伴うものの適用は、行(*saṃ-skāra)の属性であるから、証因の意味が成り立たない。意味が矛盾したものである。²⁶特定の表現を伴うものを適用する根拠とは、世俗的なことであるから。

先に第8章 k. 12 でも、「行為者と行為に、行為者と行為の因があるとは、世俗としての相互依存性である」と述べていたが、ここでは、時間の実在を主張する者たちに対して、「特定の表現を伴うものを適用する根拠」は世俗にすぎないとバーヴィヴェーカはいう。ここで「特定の表現を伴うものを適用する根拠」と云われているものは、「〔ことばの〕適用根拠」(pravṛttinimitta)を意味すると考えられる。「ことばの適用根拠」とは、‘実体’(dravya)に、ある属性を適用することで、その実体をはじめて表示しうるものになるもので、行為(kriyā)、性質(guṇa)、種(jāti)、固有名詞(yadṛcchāśabda)などがことばの適用根拠とされる。このような実体と適用根拠は文法学の上では、あくまでも言語上の問題とされているが、その背後には、ことばに対応する実在があることが前提にされている。

バーヴィヴェーカは世俗においては、そのような実体の存在と、それに適用される属性の存在を認めていることになる。そして、そのような適用根拠も、

第10章において火と薪の関係で述べられたように、「勝義としては」と限定を付された論証式のもと、その適用根拠も相互に依存したものであり、それゆえに実在しうるとは云えないと否定されることになる。

3.2 世俗という領域

以上、バーヴィヴェーカが、世俗においては、ことばの適用根拠を認めるが、慣習的勝義のレベルにおいては、「特定の表現を伴うものを適用する依存を保持する」と定義される「依存を伴うもの」という証因をもって適用根拠を否定していることを確認した。では、その「特定の表現を伴うものを適用する依存を保持する」が、語義解釈の箇所ではバーヴィヴェーカが「これを縁とすること」とした縁起の内容であろうか。

PP 第1章冒頭の文脈をみると、MK の帰敬偈が示された後に、語義解釈が行われる。その後、八不の註釈に入り、その八不すべてが勝義であるとバーヴィヴェーカは語る。バーヴィヴェーカの二諦説においては、帰敬偈の縁起は「勝義として」という限定を付して語られる、慣習的勝義に属するものである。その縁起の解釈として提示された「これを縁とすること」も同じ領域に属すると考えられるから、先の「特定の表現を伴うものを適用する依存を保持する」は、「これを縁とすること」の意味内容の一端を指している可能性はある。そうした場合、‘*pratītya*’, ‘*samutpāda*’ という語を分析して、説明することはあくまでも世俗の領域に属することであって、帰敬偈の縁起の解説としては適切ではないと判断したと考えられる⁽²⁷⁾。しかし、自らが縁起の「文の意味」として提示した「これがあるときそれがある云々」に対して、先に触れたとおり第7章では簡潔な説明にとどまり、さらにそれに対するアヴァローキタヴラタの複註で、「反論者たちが考察している縁起は慣習的なもの(**sāṅketika*)ではあるが、中観派は考察された縁起は勝義ではない⁽²⁸⁾」とするにとどまっている。

チャンドラキールティが、同じく縁起の「文の意味」とした「これを縁とすることのみ」を聖者たちの考察対象としていることは先に確認した。チャンドラキールティにとって「相互に依存した成立」を意味する「これを縁とするこ

とのみ」は、あくまでも世俗の領域にありながら、勝義へと志向する聖者たちが繰り返し考察することで解脱を得る資糧となるものとされる。つまり、バーヴィヴェーカが簡潔に扱った世俗における縁起の考察こそが、チャンドラキールティ⁽²⁹⁾にとっては勝義への道程を意味する。

それに対してバーヴィヴェーカは、世俗の領域でことばの適用根拠を認め、慣習的勝義の領域において論証式をもってそれを否定するという仕方では勝義を志向する。慣習的勝義においてことばの適用根拠は相互に依存するものであるとされるが、それはあくまでも論証式の証因の1つであって、世俗の領域で縁起そのものを考察するチャンドラキールティとはまったく異なった道程といえる。このようなバーヴィヴェーカの二諦説と勝義への道程を踏まえるならば、バーヴィヴェーカにとっての「これを縁とすること」は必ずしも「相互依存」を意味する必要はないといえる。

おわりに

以上、検討してきた両註釈書における idampratyayatā(-mātra) の意味を確認する。

バーヴィヴェーカは、「特定の表現を起こす因がある」として、ことばに対応する実在があるとする世俗を設定する。そして、慣習的勝義のレベルでその因も他の存在に根拠が求められる「依存を伴うもの」(*sāpekṣā) を証因に無自性を論証する。このことから、「勝義として」という論証式の証因に用いる「依存を伴うもの」は、無自性空を証得するためのステップの一つといえる。このようなバーヴィヴェーカの二諦説にあって、「これを縁とすること」は必ずしも「相互依存」を意味する必要はない。

それに対し、チャンドラキールティの idampratyayatāmātra は、「相互依存した〔世俗の〕成立」(parasparāpekṣikī siddhiḥ) を意味し、世俗の成立をどのように表現するかという問題と関係している。世間にはことばに対応する実在があるとする立場から、世間を、ことばに対応する実在はなく、ことばとことばが相互に依存して成立している「これを縁とすることのみ」と考察すること

が勝義への道程とされている。チャンドラキールティがことばとことばの相互依存を縁起と捉え、世俗としていることを踏まえるならば、縁起の語義解釈に関してチャンドラキールティが行ったバーヴィヴェーカ批判は、慣習的勝義のレベルにおいて、「依存を伴うもの」という証因、つまり、ことばを認めるバーヴィヴェーカに対する批判であり、二諦説の「設定の仕方」に関する批判だったといえる。

バーヴィヴェーカの「これを縁とすること」と相互依存との関係については明確にしえなかったが、以上の検討をもって、世俗から勝義へと志向する二諦説との関連において、両註釈者の縁起観が大きく相違していることを確認した。

文献及び略号表

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya*, Vasubandhu, ed. Prahlad Pradhan.
 MA *Madhyamakāvatārabhāṣya*, Candrakīrti, ed. Louis de la Vallée Poussin.
 Pras *Prasannapadā*, Candrakīrti, ed. Louis de la Vallée Poussin.
 PP *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti*, Bhāviveka. sDe3853, Pek5253.
 PP† *Prajñāpradīpaṭikā*, Avalokitavṛata. sDe3859, Pek5259.
 RĀ *Ratnāvalī*, Nāgārjuna, ed. Michael Hahn.
 YŚV *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*, Candrakīrti. see Scherrer-Schaub1991.
 De Jong, Jan Willem
 1978 “Textcritical Notes on the *Prasannapadā*”, *Indo-Iranian Journal*, 20, 1-2, pp. 25-59; 3-4, pp.217-252.
 May, Jacques
 1959 *Candrakīrti, Prasannapadā Madhyamakavṛtti. Douze chapitres traduits du sanscrit et du tibétain, accompagnés d’une introduction, de notes et d’une édition critique de la version tibétaine*, Adrien-Maisonneuve, Paris.
 Scherrer-Schaub, Cristina Anna
 1991 *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti, Commentaire à la soixantaine sur le raisonnement ou Du vrai enseignement de la causalité par le Maître indien Candrakīrti*, Mélanges chinois et bouddhiques, 25, Institut belge des hautes études chinoises, Bruxelles.
 江島恵教
 1980 「中観学派における対論の意義—特にチャンドラキールティの場合—」, 『仏教思想史』, 3, pp. 147-178.
 1985 「『中論』註釈書における「縁起」の語義解釈」, 『平川彰博士古稀記念論集・仏教思想の諸問題』, 春秋社, pp. 139-157.
 小澤千晶

2006 「清弁と相互依存の縁起—『般若灯論』の用例を中心として—」, 『印度学仏教学研究』, 109 (55-1), pp. 458-454.

梶山雄一

1969 『仏教の思想 3 空の論理<中観>』, (共著, 上山春平), 角川書店・角川文庫ソフィア, 1997.

能仁正顕

1986 「清弁の因果論に関する一考察」, 『印度学仏教学研究』, 68 (34-2), 1986, pp. 317-320.

丹治照義

1988a 『中論釈明らかな言葉 I』, 訳注シリーズ, 4, 関西大学出版部.

1988b 「生死即涅槃」, 『仏教思想 6 死』, 平楽寺書店, pp. 135-249.

永崎研宣

1999a 「Prasannapadā 第一章における「縁起」の語義解釈について」, 『印度学仏教学研究』, 94 (47-2), 1999, pp. 119-121.

1999b 「チャンドラキールティの縁起解釈について—ナーガールジュナの著作と「相互依存」解釈との関連を中心として—」, 『印度学仏教学研究』, 94 (48-1), 1999, pp. 158-160.

注

(1) 江島[1985: 143]。

(2) (1), (2)の「ある者」について, PPの復註者アヴァローキタヴラタは「ある中観定説論者」という。

(3) [PP sDe tsha46b2-4, Pek tsha54b5-55a; PP† sDe wa28b5-30b1, Pek wa33b8-36a1] rten cing 'brel par 'byung zhes bya ba la / (1) kha cig na re rten cing zhes bya ba'i tshig gi phrad ni zlos pa'i don yin pa'i phyir dang / 'brel par zhes bya ba ni phrad pa'i don yin pa'i phyir dang / 'byung ba zhes bya ba'i sgra ni skye ba'i don yin pa'i phyir rten cing 'brel par 'byung ba ste / de dang de la rten cing phrad nas 'byung ba'o zhe'o / / (2) gzhan dag na re so so 'jig pa dang ldan pa rnam kyī 'byung ba ni rten cing 'brel par 'byung ba'o zhe'o / / (3) gzhan ma yin pa ni de yang mi rung ste / mig dang gzugs rnam la brten nas mig gi rnam par shes pa 'byung ngo zhes gsungs pa 'di la don gnyi ga med pa'i phyir ro / / 'o na gang yin zhe na / 'di yod na 'di 'byung la 'di skyes pa'i phyir 'di skye ba ste zhes bya ba **rkyen 'di dang ldan pa nyid** kyī don ni / rten cing 'brel par 'byung ba'i don to zhes zer ro / /

上記の箇所, (1), (2)はPras 7.6-8.1に, (3)はPras 8.10-11, 9.7-8に引用されている。なお, 本稿では取り上げなかったが, AKBhとPP, Prasの縁起の語義解釈の箇所を紹介したものに, 楠本信道『『俱舍論』における世親の縁起観』(平楽寺書店, 2007年)がある。

(4) 江島[1985: 150]。なお, pp. 142-143では, アビダルマの縁起解釈に対する批判を込めて, 消極的な記述になったのではないかと述べており, この点では, 次に

あげる能仁1986の推測と近いものとなる。

- (5) 能仁[1986: 787]. パーヴィヴェーカがいう「これを縁とすること」という表現が「相互依存」を意味する根拠として、この語がナーガールジュナの『空七十論』に見られること、また Pras のパーヴィヴェーカ批判の最後で、「これがあるときにそれがある。例えば、短があるときに長があるようにと〔パーヴィヴェーカ自身が〕註釈しているのだから、同じことが認められたことになるではないか」とチャンドラキールティが述べていることをあげる。[Pras 10.6-10.9] atha,

asmin satīdam bhavati hrasve dīrgham yathā sati (RĀ I-48),
iti vyākhyāyamānena nanu tad evābhyupagataṃ bhavati, hrasvaṃ pratītya hrasvaṃ
prāpya hrasvaṃ apekṣya dīrgham bhavātīti, tataś ca yad eva dūṣyate tad
evābhyupagamyata iti na yujyate //

「また、

これがあるときにそれがある。例えば、短があるとき長があるようにと註釈しているのだから、「短を縁として、短に到達して、短に基づいて、長がある」という、まさにその同じことが〔パーヴィヴェーカによっても〕認められたことになるではないか。したがって、論駁していること、それこそが認められているのだから、〔パーヴィヴェーカの解説は〕適切ではない。」

- (6) [Pras 5.1-5.6] etir gatyarthaḥ, pratiḥ prāptyarthaḥ / upasargavaśena
dhātvarthavipariṇāmāt,

upasargeṇa dhātvartho balād anyatra nīyate /

gaṅgāsānilamādhuryaṃ sāgareṇa yathāmbhasā //

pratītyaśabdo 'tra lyabantaḥ prāptāv apekṣāyām vartate / samutpūrvaḥ padīḥ
prādurbhāvārtha itī samutpādaśabdaḥ prādurbhāve vartate // tataś ca
hetupratyayāpekṣo bhāvānām utpādaḥ pratītyasamutpādārthaḥ //

- (7) [Pras 368.7: ad. MK XVIII-7] pratītyasamutpādāvino hi mādhyamikā
hetupratyayān prāpya pratītya samutpannatvāt sarvaṃ evehalokaparalokaṃ niḥ-
svabhāvaṃ varṇayanti / 「というのは、中観論者は縁起論者であるから、この世と
かの世のまさにすべては、諸因縁に到達して、〔つまり〕依って生起したものである
から、無自性であると説明する」

なお、ブッダパーリタも縁起論者を自認する。ブッダパーリタが実在論者と対照
させて「縁起論者」と宣言したのに対して、チャンドラキールティが虚無論者と対
照させて「縁起論者」を自認していることについては、斎藤明「空性論者から縁起
論者へ—Buddhapālita を中心として—」(『江島惠教博士追悼記念論集 空と実在』,
春秋社, 2000, pp. 93-115)。

- (8) [Pras 54.10-55.2] ucyate / saṃvṛtir eṣā(*) na tattvaṃ / kiṃ saṃvṛter
vyavasthānaṃ vaktavyaṃ // **idaṃpratyayatāmātreṇa** saṃvṛteḥ siddhir
abhyupagamyate / na tu pakṣacatuṣṭayābhyupagamena sasvabhāvavād aprasaṅgāt,
tasya cāyuktatvāt, **idaṃpratyayatāmātrābhyupagame** hi sati hetuphalayor
anyonyāpekṣatvān nāsti **svābhāvikī siddhir** iti nāsti sasvabhāvavādaḥ / (*) Pras:

saṃvṛtir eva. Tib.: 'di ni kun rdzob yin gyi, R: saṃvṛtir evā. ここはチベット訳にしたがった。

- (9) [Pras 189.1-9: ad. MK VIII-12] tad evaṃ niḥsvabhāvanām sarvabhāvanām kuto yathoktaprakārasiddhiḥ / tasmāl laukikaṃ viparyāsam abhyupetya sāmṃvṛtānām padārthānām marīcīkājalakalpānām **idaṃpratyayatāmātrābhyupagamenaiiva** prasiddhir nānyenety āha /

pratītya kāraḥ karma taṃ pratītya ca kāraḥ /

karma pravartate nānyat paśyāmaḥ siddhikāraṇaṃ // MK VIII-12

ihākurvāṇasya karmanirapekṣasya kāratvābhāvāt, karmāpekṣya kārakasya kāratvaṃ bhavati / kāraṇa cākriyamāṇasya kasyacit karmatvābhāvāt, kriyamāṇasyaiva karmavyapadeśāt, taṃ kāraṇaṃ pratītya karma pravartata ity **evaṃ karmakāraḥ paraspārāpekṣikīm siddhiṃ** muktṡā nānyat siddhikāraṇaṃ paśyāmaḥ //

- (10) [Pras 190.7-8: ad. MK VIII-13] teṣāṃ kartṛkarmavicāreṇa svabhāvato 'stitvaṃ pratiśidhya paraspārāpekṣikīm eva siddhiṃ prājño nirmumukṣur jarājātimaran. ādibandhanebhyo duḥ khakṣayāya vibhāvayet //

- (11) 丹治[1988b: 193-194]参照。唯世俗についてはMA 108.3-13. MA では声門・独覚も「これを縁とすることのみ」を観察するとされる (MA 302.10-13)。

- (12) ここでいわれる「考察なしに」(avicāra) とシャーントラクシタをはじめとする後期中観派で規定される「考察が加えられなければ好ましいもの」(avicārārāmanīya) との関連については、丹治1988bで、ここと同様の議論を行う第一章の記述 (Pras 67.10-68.1) をもとに論じられている (丹治[1988b: 211-217])。ただ、以下で確認していく paraspārāpekṣikī siddhiḥ と paraspārāpekṣayā siddhiḥ の相違には言及しておらず、paraspārāpekṣayā siddhiḥ だけでなく、paraspārāpekṣikī siddhiḥ (丹治訳では「相互依存的成立」) も含めて、縁起そのものが「不合理なもの」とされているとしている。たしかにいずれも世俗ではあるが、少なくとも、無自性なる世間のありようを表す paraspārāpekṣikī siddhiḥ は、チャンドラキールティにとって「考察を行う智者」たちが承認する世間のあり方である (cf. Pras 345.13-16)。「相互依存しての成立」(paraspārāpekṣikī siddhiḥ) がチャンドラキールティの縁起理解を代表する用語であることはこれまでも指摘されているが (cf. May [1959: 17, 154(n. 463)], Scherrer-Schaub [1991: XL, 111-112(n. 26), 240-243(n. 462)]), 「相互依存による成立」(paraspārāpekṣayā siddhiḥ) との使い分けについては、Scherrer-Schaub [1991: 111-112(n. 26)] で触れられているにすぎない。

- (13) [Pras 172.12-173.6: ad. MK VII-32] yasmād ātmano (*) niḥsvabhāva bhāvās te ca niḥsvabhāva eva santo bālānām idaṃsatyābhiniveśinām vyavahārapatham upayānti avicāraprasiddhenaiva nyāyāneti teṣu nāsti yathoditavic āravatāro 'smākaṃ / māyāsvapnagandharvanagarādivat tu laukikāḥ padārthā (*) nirupapattikā eva santāḥ sarvalokasyāvidyātimirophatamatinayanasya prasiddhim upagatā iti

parasparāpekṣayaiva kevalaṃ prasiddhim upagatā bālair abhyupagamyante / (*)
 LVP: ye svātmanā, R: yasmān mama, Tib: 'di ltar dngos po rnam ni rang nyid rang
 bzhin med pa yin la/. de Jong はチベット訳を yasmāt svataḥ と還元するが、R 本に
 従うように指示している。ここではチベット訳を踏まえて yasmād ātmano と読む。
 (*) LVP: padārthāḥ, R: padārthā, R 本に従う。

- (14) [Pras 58.1-3] bhāvānām avidyātimiropahatamatinayanatayā viparītaṃ svabhāvam
 adhyāropya kvacī ca kaṃcid viśeṣam atitarāṃ parikliśyanti prthagjanāḥ /
- (15) [MA 107.5-11] de la 'dis sems can rnam ji ltar gnas pa'i dngos po lta ba la rmongs
 par byed pas na gti mug ste / ma rig pa dngos po'i rang gi ngo bo yod pa ma yin pa
 sgro 'dogs par byed pa rang bzhin mthong ba la sgrib pa'i bdag nyid can ni kun
 rdzob bo / / kun rdzob des gang zhig bden par snang zhing rang bzhin med bzhin du
 rang bzhin du so sor snang ba de ni 'jig rten phyin ci log tu gyur pa'i 'kun rdzob tu
 bden pas 'jig rten gyi kun rdzob kyi bden pa ste⁴/ de ni bcos ma rten cing 'brel bar
 'byung ngo / / 「この〔VI-28頌〕について、これによって有情たちはあるがまま
 の存在を見るということに対して、当惑しているので、愚痴である。〔つまり〕あ
 りもしない存在の自体を増益し、自性を見ることを妨げること (*āvaraṇa) を本性
 とする無明 (*avidyā) が世俗だということである。その世俗によって、なんらか
 のあるものが諦として顕現し、無自性なものが自性として別々に顕現する、それが、
 顛倒した世間世俗における諦であるから、世間世俗諦である。そ〔の世間世俗諦〕
 とは、作られたもの (*kṛtrima) であり、縁起である」(『⁴ MA: kun rdzob tu bden
 ste. デルゲ版によって改めた ('a254b6))。
- (16) [Pras 206.11-13: ad. MK X-8] atrāha / yady apy agnīndhanayoḥ strīpuruṣavatpar-
 asparanirapekṣā siddhir nāsti, tathāpi parasparāpekṣā tāvad asti / tataś cāsty
 evāgnīndhanayoḥ svarūpasiddhiḥ parasparasāpekṣatvāt, na hy avidyamānayoḥ
 vandhyāputraduhitroḥ parasparāpekṣatā dṛṣṭeti //
- (17) [Pras 208.16-209.6: ad. MK X-11] itaś cāgnīndhanayoḥ **parasparāpekṣayāpi
 siddhir** asatī siddhāsiddhāyoraḥ apekṣābhāvād iti pratipādayann āha /
 yo 'pekṣya sidhyate bhāvaḥ so 'siddho 'pekṣate katham /
 athāpy apekṣate siddhas tv apekṣāsyā na yujyate // MK X-11
 yo hy agnyākhyo bhāva indhanākhyam bhāvam apekṣya sidhyati so 'siddho
 vendhanam apekṣate siddho vā / yady asiddhas tadāsiddhatvāt kharaviśāṇavan
 nendhanam apekṣeta / atha siddhaḥ siddhatvāt kim asyendhanāpekṣayā, na hi
 siddham punar api sādhyate vaiyarthiyāt / evam indhane 'pi vācyaṃ // tasmān
nāgnīndhanayoḥ parasparāpekṣayā yaugapadyena vā **siddhir** iti //
- (18) [Pras 213.11-12: ad. MK X-15abc] yata evaṃ pañcaśu prakāreṣv ātmano na
 sattvaṃ, tasmāt karmakāraṇakavad evātmopādānayoḥ **parasparāpekṣikī siddhir iti
 sthitaṃ** //
- (19) 今回取り上げた用例以外で、唯世俗、つまり「成立」と同格で表わされる「相互
 依存」は、Pras 67.11, 78.11, 189.15, 190.7, 199.10, 200.3, 214.4, 253.12, 345.2,

527.14, 528.4 に確認できる。他に MA 150.4-5, 151.20-152.1, 290.2-3, YSV 22.27-23.2 に用いられている。なお、MK ではこの「相互依存した成立」(parasparāpekṣikī siddhiḥ) をいう表現は見られないが、四讃のひとつ Lokāṭītaṣṭava(LAS) にこの表現が用いられている。

kartā svatantraḥ karmāpi tvayoktaḥ vyavahārataḥ /

parasparāpekṣikī tu siddhis te 'bhimatānayoḥ // LAS 8

行為者と行為についても自立していると、言説という点から、あなたは語った。しかし、それら二つの成立は相互依存してのものであるというのが、あなたの認めたことである。

増益した自性による「相互依存による成立」を示す用例は、Pras 75.10, 455.11.

- ②① [PP sDe tshal106b5-6, Pek tshal130b2-3: ad. MK VII-16] 'di yod pas 'di 'byung la / 'di skyes pa'i phyir 'di skye ba 'di lta ste / ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnamz zhes bya ba la sogs pa gang gsungs pa de kun rdzob tu gsungs kyi / don dam par ma gsungs par khas len pas khas blangs pa'i gnod par mi 'gyur ro // 「これがあるときそれがある、それが生じるからそれが生じる。すなわち、無明という縁によって行がある」云々と説かれていること、それは世俗として説かれているのであって、勝義としては説かれていないと承認しているので、承認されたことを損なっているのではない」 [PPt sDe zhal131b1-2, Pek zhal148b2-3] 'dir pha rol po dag gis brtags pa'i rten cing 'brel par 'byung ba ni brdar btags pa yin gyi / dbu ma pas brtags pa'i rten cing 'brel par 'byung ba ni don dam pa ma yin par bstan pa'i phyir... 「ここで、反論者たちが考察している縁起は慣習的なもの (*sāṅketika) ではあるが、中観派は考察された縁起は勝義ではないと説いているから…」

- ②② [PP sDe 117b6-7, Pek 144b2: ad. MK VIII-12] byed pa po dang las nyid la byed pa po dang las kyi rgyu yod pa ni **tha snyad par phan tshun ltos pa nyid yin** gyi / de ma gtogs par de las gzhan pa 'grub pa'i rgyu ni ma mthong ngo //

- ②③ sDe tshal134a1-3, Pek tshal164b6-8.

- ②④ sDe tshal134a3-5, Pek tshal164b8-165a3.

- ②⑤ [PP sDe tshal134a5-7, Pek tshal165a3-7: ad. MK X-9: PPt sDe zha224b3-225b4, Pek zha260a6-261b4] ci ste yang bud shing dang por grub pa'i phyir skyon med do snyam na de'i phyir bshad pa /

gal te shing ltos me yin na // me grub pa la sgrub par 'gyur // MK X-9ab me grub pa la **brjod pa khyad par can bsnyad pa nyid kyi phyir** bud shing la ltos pa'i phyir ro zhes bya bar dgongs so // de ltar rtog pa la /

bud par bya ba'i shing la yang / me med par ni 'gyur ba yin // MK X-9cd bud shing de sngar me la ma ltos par yang bud shing nyid du grub pa'i phyir ro zhes bya bar dgongs so // de ni mi 'dod pas 'dir glags yod pa'i tshig yin pa'i phyir rjes su dpag pa mngon te / don dam par bud shing ni me'i snga rol na grub pa med de / **ltos pa dang bcas pa'i phyir** dper na me'i rang gi bdag nyid bzhin te / rgyas par ni snga ma bzhin no //

(25) [PP sDe tsha71b2-71b5, Pek tsha86a1-86a5: ad. MK II-20: PPt sDe sa264a4-265a6, Pek sa307b2-308b8] gzhan pa nyid du smra ba yang 'gro ba po med pa'i 'gro ba dang / 'gro ba med pa'i 'gro ba po mi 'dod do / / glags yod pa'i sgo des phyogs kyi chos ni 'gro ba po dang / 'gro ba **ltos pa dang bcas pa nyid** yin la bsgrub par bya ba chos ni gzhan pa ma yin pa nyid yin / dpe ni de'i dbang gis bsgrub par bya ba dang / sgrub pa'i chos grags pa dang ldan pa'i chos can yin par bstan to / / 'dir sbyor ba'i tshig ni

don dam par 'gro ba po las 'gro ba gzhan pa nyid ma yin par shes par bya ste / **brjod pa khyad par can 'jug pa'i ltos pa dang bcas pa'i phyir** dper na / 'gro ba'i rang gi bdag nyid bzhin no / /

de bzhin du don dam par 'gro ba las kyang 'gro ba po gzhan pa nyid ma yin par nges par gzung bar bya ste / **brjod pa khyad par can 'jug pa'i ltos pa dang bcas pa'i phyir** dper na 'gro ba po'i rang gi bdag nyid bzhin no / /

(26) [PP sDe tsha195b2-5, Pek tsha244a7-b3: ad. MK XIX-6cd: PPt sDe za114a4-114b3, Pek za138b7-139b1] dus yod par smra ba dag na re / dus ni yod pa kho na yin te / brjod pa khyad par can 'jug pa'i phyir ro/ / 'di na gang med pa de ni brjod pa khyad par can 'jug pa'i rgyu nyid yin par ma mthong ste / dper na ri bong gi rva bzhin no/ /dus ni sab ma byas so byed do byed par 'gyur ro zhes brjod pa khyad par can 'jug pa'i rgyu nyid yin par mthong bas de'i phyir dus ni yod pa kho na yin no zhes zer ro/ /

de ni bzang po ma yin te / byas pa la sogs pa'i brjod pa khyad par can 'jug pa ni / 'du byed kyi chos yin pa'i phyir / gtan tshigs kyi don ma grub pa nyid do/ /don 'gal ba nyid kyang yin te / brjod pa khyad par can 'jug pa'i rgyu nyid ni kun rdzob pa nyid yin pa'i phyir ro/ /

(27) チェンドラキールティはパーヴィヴェーカが「縁起」の語義解釈を行わなかった点も批判している (Pras 9.7-10.6).

(28) 注20 参照。

(29) [YŚV 22.3-7] rten cing 'brel par 'byung ba bstan pa rkyen nyid 'di btsam 'di ni bden pa gnyis phyin ci ma log par mthong ba'i rgyur gyur pa'i phyir 'phags pa'i skye bo thams cad gshegs shing rjes su gshegs pa drang po zla med pa/ 'dus byas thams cad yongs su spangs pa/ mya ngan las 'das pa'i grong khyer du gcig tu gzhol bar 'gyur ba'i lam chen po'o/ / 「縁起を示す「これを縁とすることのみ」というこれは、二諦を顛倒せずに見る因となるものであるから、すべての聖者たちが向かい迎える、まっすぐにして無比なる、一切諸行を完全に断つ涅槃の城への一路大道である」